

## ハーブのあるまちづくり ～ゆにガーデン～



道央の農村地帯にある人口約7,000人の由仁町は、町の基幹産業である農業をはじめとする産業の課題とまちづくりの課題を併せて解消するため、日本最大規模の英国風ハーブガーデンを中核とする「ハーブのあるまちづくり」に取り組んでいる。この中核となる施設「ゆにガーデン」は、昨年6月のオープンから1年経った。このハーブをテーマとした、いわば地域文化を創る取り組みが地域にどう受けとめられ、定着しているかを見たい。

### 大都市に近い田舎づくり

由仁町は、札幌や新千歳空港などの大都市や交通要衝に隣接する。水稲単作型の農業が中心であるが、畑作面積の比率も比較的多く、多種多様な農作物が生産されている。

近年、由仁町でも土地利用型農業から高収益型複合農業への転換が求められており、大都市に近いという位置的条件のメリットを生かした収益性の高い都市近郊型の複合農業の確立を推進するとともに、都市と農村の共生交流を視点におき、「緑豊かな農村環境を整備し、豊かさや安らぎのあるまちづくりをめざす」という基本構想のもと、「大都市に近い田舎づくり」をめざしている。

### ハーブのあるまちづくりを

平成7年、まちづくりについてコンサルタント契約を結んだ三井物産(株)から「ハーブのあるまちづくり事業」が提案された。農村

と都市の共生の素材として、基本コンセプトを「ハーブ」にすえた事業展開を図るというものである。

従来の生活にはなかったものが提案されたことに、役場職員はもちろん、町民も最初はやはり違和感を覚え、戸惑いを隠せなかったようだ。特に男性にはとっつきにくい領域でもあった。町の商工観光係長若林貴彦さんによれば、「なぜそんなものを。他にすることがあるだろう。そんな声も決して少なくなかった」そうだ。

しかし、この「ハーブ」こそ、由仁町の模索していた「大都市に近い田舎づくり」の条件と合致していた。土を相手にする農村にとって、ハーブは同じ植物として身近なものである。おりしも都市部ではガーデニングやアロマセラピーがブームで、商品価値も高い。また、ブームとはいえ、健康や安らぎという面では単なる一過性のものではないとの目論みもあった。

ハーブのあるまちづくりは、ま

ず町内でハーブを栽培するところから始まった。平成7年、農協の婦人部を中心に、「ゆにハーブの会」が発足、由仁の気候風土にあった育て方や利用法の研究に取り組む。これに続き、平成9年には苗の栽培を目的とする「ゆにフレグランスの会」も発足。栽培した苗を近郊市町にチラシを配布して直売、ハーブ以外の農作物も売った。これが大きな反響を呼ぶ。生産者側してみれば、今までは農協に出して終わりだったのが、消費者の顔が直接見えるようになった。また、消費者側も生産者の顔が見える。ハーブの上手な育て方、使い方、野菜のおいしい食べ方などの話題をきっかけに両者の間に会話が生まれ、親近感や信頼感が得られる。そしてこれが一度で終わることなく、恒久的な交流へとつながり、両者それぞれに意識の変革をもたらした。

また、環境と調和を考える「ガーデニングコンテスト」も平成

11年から開催され、町民のハーブやガーデニング意識の高揚に大きな役割を果たしている。

### ゆにガーデン

都市と農村の交流・共生の中心的施設であるハーブガーデンについては、平成9年に町と農協、提案した三井物産(株)、近隣のゴルフ場などを経営する東武ランドシステム(株)の4者で第三セクター「株式会社ゆにガーデン」を設立、農林水産省の中山間事業、山村振興事業、産地形成促進事業と国土交通省の都市公園事業を一体として活用、整備に着手。13年6月、総面積14.2ヘクタールという国内最大規模のハーブガーデン「ゆにガーデン」をオープンさせた。

滝上町のハーブガーデン運営に携わった経験をかわれ、招かれた井上幸子園長は、自らの子育てをきっかけとしてハーブを深く愛する専門家。単なる第三セクターの運営という領域を超え、「ハーブを通じ、由仁町の農業はもちろん、町全体、さらには町外も含めて、精神的な潤いと元気に一役買いたい」と言う。

ゆにガーデンは、「地球上の生物は、すべて植物に依存して生きている」という「イギリス王立キューガーデン」を手本とした英国風庭園で、広い芝生を中心に、用途や色、香りなどテーマをもったハーブガーデンが広がる。屋内にはハーブを使った料理やハーブティーが楽しめるレストランやカフェテリア、越冬できないハーブを中心とした温室、ハーブを使った料理やクラフト、染物などが体験できる教室、専門の相談員に植物の育て方や管理などを相談できる「緑の相談室」、町内で栽培されるハーブや農作物のほか海外から輸



井上幸子園長

入されるハーブ関連商品を扱うショップなどがある。

ツアー客も訪れるようになったが、なかには「花がないじゃないか」と言う人もいるそうだ。見るだけの観光のつもりで訪れるとギャップを感じるかもしれない。ここは、五感でやすらぎを得る施設なのである。芝生は基本的に立ち入り可。ハーブは自由に手で触れて香りを楽しめる。そして、一度訪れて終わりという園内完結型の観光施設ではなく、ハーブを軸として町内、町外、道外との日常的な交流拠点となることを意図している。1回の入園料は800円だが、シーズン券が1,500円で設定されていることからこのことがうかがえる。隣接する温泉「ユニの湯」の入浴料とセットの割引もあり、リフレッシュという共通項を持つ施設同士での連携がある。

今年は4月20日にオープンし、この1ヵ月で約3万7千人と、昨年3ヵ月とほぼ同数の来園者になっているとのこと。滑り出しは順調のようだ。

### 都会に近い田舎暮らし

都会の人々の「田舎暮らし」の求めに応じ、由仁町に住んでもらい、広い敷地内で菜園や庭づくりをしても

らおうということで、区画割りや利用法などを入居者全員で話し合った上で決めて行く「コーポラティブ方式」による「優良田園住宅」施策を進めている。

平成13年度に募集した10区画に対して、主に道外などの都市部から実に145件もの応募があった。本年度も18区画を募集した。「都市と農村」の境界そのものにも踏み入り、両者の融合や協調といったことについてのひとつの形を具現化している。

### 新しい生活文化の創造へ

基本的な生活基盤がほぼ整備され、経済効率重視の社会生活の中で、多くの日本人が失いかけてきた精神的なゆとりや豊かさを、ハーブという素材を軸に、町民の日常生活に結びつけ、いわば「由仁町的生活文化」とするこの試み。

町の主産業でもあり生命の根幹にも関わる農業を通して、都市と近郊農村の、行政区域を超えた交流・共生を促し、良好な関係を築きつつある由仁町に、これからの農村部における地域振興のひとつの姿が見える。

ゆにガーデン  
夕張郡由仁町伏見134-2  
TEL 01238-2-2001

